

お茶うけ 第30話

ノンちゃん 雲に乗る

「ノンちゃん 雲に乗る」を読みました。映画にもなった有名な童話なので、ご存じの方も多いと思いますが、私は今回が初めてでした。

これは、小学校2年の女の子「ノンちゃん」の体験談の形をとっています。

ある朝、ノンちゃんは自分に黙って、お母さんと兄のタケシ君が東京のお祖父さんの家に出かけてしまったことを知ります。これは、ノンちゃんには絶対に許せないことでした。お母さんは、ノンちゃんが2年生になったら、東京へ連れていくと約束していました。いつも「約束は守るのですよ」と教えていた母親が、自から約束を破ることは許せません。ノンちゃんは、思いっきり泣きわめきます。お父さんと、お母さんの留守居役の叔母さんが、訳を言い聞かせたり、夕方には帰るからと宥めても泣き止みません。「お母さんが約束を破って、ノンちゃんを置いて東京へ行ってしまった」という、ノンちゃんにとってどうしようもない出来事が悲しくて仕方がないのです。「大人はわかってくれない」と、ノンちゃんは泣きながら家の近くの池に行き、岸辺の木ののぼり、高い木の枝に跨がって、お空を鳥のように何処かに飛んで行きたいなど、両手を広げました。ハッとして、ノンちゃんは枝にしがみつきましたが、体は枝の回りをクルリと一回転していました。



ノンちゃんは、空のおじいさん(「高砂」のじいばあさんのじいじにそっくり)に熊手で、ふわふわした雲の上に引き上げられます。それからノンちゃんは、雲の上のおじいさんに、感心されたり、面白がられたり、上手にときほぐされながら、自分の「生い立ちの記」を話します。

「ノンちゃんの家」、「おとうさん」、「おかあさん」、「にいちゃん」、「ノンちゃんのある日」と話そうちに、おかあさんがノンちゃんを健康を気づかって、おとうさんと相談の上、今日の東京行きに連れていかなかったのだと気付きます。ノンちゃんは五つの時、東京で重い赤痢にかかり死にそうだったので、田舎に引っ越してきたのでした。にいちゃんがノンちゃんをいじめる話の中で、いつもノンちゃんは良い子です。その考えは危険だよと、おじいさんは、ノンちゃんに「ひれふす心の大切」と、「にいちゃんの側に立って考える」ことを話して聞かせます。

おじいさんに自分と家族のことを、こと細かに話そうちに、ノンちゃんに家族を新しい目で見える心が芽生えました。やがておじいさんに送られて家に帰ることになりました。

頬にポタポタ落ちる雫に気がついて目を開けると、ノンちゃんは家の布団に寝かされていて、間近におかあさんの泣き顔があります。あの時、ノンちゃんは木から落ちて気を失ったのです。急を聞いて東京から帰ったおかあさんは、心配のあまり泣いていました。私は、ノンちゃんが雲の上で、聞き上手のおじいさんに会い話すことができ、本当に良かったと思います。信頼できる人に、心を開いて自分と家族の話をするのは、自分の独りよがり気づいたり、「ひれふす心」や「相手の側に立って考えること」を育てる良い機会なのです。雲から帰還したノンちゃんの行動には、何かゆとりが感じられました。

河合隼雄(臨床心理学者、現国際日本文化センター所長)は、多くの患者に対して行った心理療法の経験から、患者は信頼できると認めた治療者に対してのみ心を開くと言います。「患者も主観を持っています。治療者がその主観の世界を患者と共有しようと、患者が治療者を主観を共有する人と認めるとき、患者は来談を続けます。例えば、高校生の患者が来て、「うちのお母さんは鬼みたいな人です」と言ったとき、私はその事実関係を確かめるよりも、彼が「母親は鬼」と思っている主観の世界を、できるかぎり共有しようとします。何故なら、その時「いや、そうではないよ」と彼に伝えても同意は得られません。それより、敢えて主観の共有に踏み切った私と彼とが、話し合い、見直し、考え直すうちに、不思議なことに、彼が主観の世界で見ていたものの様相が変わってきます。それは、「たましい」の触れ合いなのでしょうが、両者が共倒れになる危険性を含む厳しい行為でもあります」と、真摯に書いています。

(『子どもの本を読む』P21～より)

以上

参考文献:

『ノンちゃん 雲に乗る』 石井桃子著 福音館書店刊 1976年初版発行
『子どもの本を読む』 河合隼雄著 光村書店刊 1985年第一刷発行